

國學院大學學術情報リポジトリ

Nanpo and the influence of the Kibyoushi created by Harumachi during the Tenmei period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakamura, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000470

天明期の春町作黄表紙と南畝

中村正明

はじめに

黄表紙の創始者として文学史に名を刻む恋川春町は、作者として活躍した安永・天明期にはすでにその名が知られた戯作者であった。ところが、決して順風満帆に著作活動を続けたわけではない。安永末から天明初年に及ぶ数年間、おそらくは板元鱗形屋孫兵衛の出版活動休止に合わせて、自らの署名を附した黄表紙作品を板行しない期間があった。⁽¹⁾その後再び執筆・刊行することになるが、それらは以前の作品とは異なる傾向が見ら

れるようになった。その概要は、拙稿「恋川春町の戯作意識と方法」としてまとめているので参照されたい。⁽²⁾

本稿はそれを享け、春町の作風変化について、その理由を探るものである。先に結論を述べてしまうと、春町作品の変容には、大田南畝の影響がかなり強かったのではないかということである。春町と南畝の関係を、様々な文献資料を押さえつつ検討していくことにしたい。それらは多分に周辺資料ばかりになるであろうが、その累積によって浮かび上がってくるものを丹念に掘り取っていきたいと考える。

春町の黄表紙創作活動は、安永四年の『金々先生栄花夢』か

ら始まり、寛政元年正月刊行の『鸚鵡返文武二道』までの十五年間に行われた。春町はこの寛政元年七月七日に逝去している。寛政十年刊『須臾之間方』は春町遺稿と銘打ったものだが、死後間隔が開きすぎていることや内容の稚拙さによって、名を借りただけの別人作品ではないかという説も出ている⁽³⁾。それでも一応春町作に数えておくと、外題のみ知られるが未刊行であったと思しい一作を除いて、全三十三作品を刊行している。

一、狂歌における春町と南畝

本稿は黄表紙を中心に春町と南畝の関係を探るものであるが、二人の交流を考えるに当たって、どうしても狂歌活動を省くわけにはいかないだろう。以前、拙稿「酒上不埒の狂歌」において、不埒（春町）と赤良（南畝）の関係について述べたので、ここでは略説するのみにしたい。

不埒の狂歌活動は天明元年頃に始まった（『としの市の記』⁽⁴⁾）ようであるが、その契機となったのは、時期的に考えても『菊寿草』で縁のあった赤良の影響であったろう。不埒の参加した狂歌会や催事には必ずといってよいほど赤良の名が見えるし、赤良編『狂歌』⁽⁵⁾『狂歌』⁽⁶⁾『老菓子』（天明四年刊）にも不埒は狂文を収めて

いる。また、『游戲三昧』や不埒自筆詠草を収めた『粟花集』も赤良の編んだものである。天明三年以降の赤良・菅江らの関わっている狂歌会や行事には不埒の名が散見され、また『万載狂歌集』（天明三年刊）に始まり次々簇生されていった狂歌集の多くに、不埒は狂歌を入集していった。

天明狂歌壇のリーダー的存在である赤良なので、江戸における多種多様な狂歌活動に常と言ってよいほどその姿が見られるのは当然であるが、春町からすると狂歌師として外様に近い立場であるため、赤良に頼る気持ちはあつたのかもしれない。狂歌界において不埒と赤良は非常に身近な存在であつたと言えるだろう。

二、黄表紙における春町と南畝

(一) 南畝の内なる春町

それでは、黄表紙における二人の関係性を考えていくことにしたい。黄表紙における春町と南畝の交流を明示する資料はほとんどなきに等しいが、幾つかの作品及び周辺資料が示唆するもののできる限り丹念に拾い、考察を試みたい。

言うまでもないことだが、元来南畝は黄表紙作者であつたわ

けではない。江戸中期以降、江戸地本の勃興に伴う文人戯作の作者の一人として注目され活躍した人物であり、狂詩狂文集や談義本等を刊行している。安永期には、『甲賦新話』（安永四年序）、『評判茶臼芸』（安永五年刊）や『南客先生文集』（安永八年刊）など洒落本を手掛けるなど、数多くの様々な戯作に手を染めた人物であった。彼は幕臣としての縁からか、多くの武家とも交流があり、また板元や戯作者、狂歌師、絵師、富裕な町人らと文化的な交遊を深めることで、実に広範な交友を行った、言わば文人ネットワークの中心的人物として有名である。殊に、狂歌壇において、狂号「四方赤良」の称とともに天明狂歌を先導し、盛り立てていったリーダー的存在として大きな影響力を持っていたことは、前にも記した通りである。

それでは、春町の本拠地ともいべき黄表紙において、南畝と春町の関係はどのようなものであったのだろうか。まずは、南畝からのアプローチという視点から見てみたい。

安永四年以降、黄表紙の通人性と当世化を牽引していった作者の一人が春町であった。その一方で、南畝と黄表紙との関わりは、安永期に限っていうと全くない。但し、草双紙には興味があったことが分かっている。『半日閑話』卷十三「安永五年丙申」正月の条に、草双紙の表紙の色の变化や絵題簽の変容に

ついて記しているのである。⁽⁵⁾その後半には「…今年新板の内高慢軒行脚日記といへる本行はる。画工恋川春町作也」と記し、すでに春町作品を読んでいることが知られる。その欄外にも追考として「去年夏か秋の頃絵草紙でる。金々先生栄花夢と云名也。此絵草紙より風を變ず」と書き込んでいる。同書「安永六年丁酉」正月条には「当年の絵草紙、鱗形屋新板、恋川春町画并作あまた、氣三二大に行はる（中略）桃太郎後日晰、花見婦嗚呼怪哉杯面白し」とあり、年ごとの新作黄表紙は読んでいたであろうことが推測される。

南畝と黄表紙との最初の関わりは、天明元年正月に板行された四方屋本太郎作『虚言八百万八伝』に序文を寄せたことであつたらう。

その南畝は、同じ天明元年正月に黄表紙評判記『菊寿草』を刊行する。本書は当年正月に上梓された黄表紙全四十三作品を組上に上げて、役者評判記を模して位付けと評言を附した、言わば新刊ガイドブックであった。南畝の『菊寿草』執筆意図について、作中には明記されてはいないが、和田博通氏は、次のように述べている。⁽⁶⁾

…黄表紙が安永期の大衆化した洒落本と同質化することを

阻止し、より知的な文学であった初期の戯作に近づけようとするところにあった。そうすることによって、何物にもとられない自由を黄表紙のうちに確保しようとしたのである。

全三冊から成る『菊寿草』は、上巻一冊(全十四丁)の後半七丁を使って、南畝(無署名)による狂文「北条の三鱗を一寸と葛西の太郎月」を載せる。鎌倉の町人鱗屋が、北条家に伝わる三ツ鱗を探すうち、鱗の持ち主である龍に大通の奥義書一卷を授かる夢を見るという物語が綴られるが、この鱗屋は言うまでもなく地本問屋鱗形屋孫兵衛である。狂文中にも古くから草双紙を商う人物として描かれている。彼が探し求めた三ツ鱗は人間に姿を変えると鯉川春丁と名乗る。恋川春町のことである。三ツ鱗(春丁)は「貴賤上下ひつくるんで皆大通へみちびかん」とする存在と説明される。

南畝はこの狂文で春町を黄表紙によって世の読者たちを通の世界へと誘う人物としているのである。安永期まで通書として存していた洒落本ではなく、新たに勃興してきた黄表紙にその役を当てていることに注目したい。右の和田論はその点を捉えて、変質してしまった洒落本とは差別化した黄表紙の方向性を

指示したものとしたのであるうか。いずれにしても、南畝は、黄表紙という戯作における春町の重要性を明確に示している。「北条の三鱗を一寸と葛西の太郎月」の別の部分では、黄表紙の創始に触れた有名な一節が見られる。

…二十余年の栄花の夢金く先生といへる通人いで、鎌倉中の草双昏これかために一遍してどうやらこうやら草双昏といかのほりハおとなの物となつたるもおかし(十三才)

『金々先生栄花夢』から黄表紙が始まったとする文学史的な定説についての最初の指摘である。洒落本作者でもあった南畝は、洒落本の物語と通人性を草双紙に取り込んだ金々先生の斬新さ、可笑しみにすぐ気付いたことは先の『平日閑話』の記事から確認できる。それを契機とした草双紙の当世化・戯画化の動きには敏かった。折しも、安永期の大衆化した洒落本と密接に繋がりがながらも、絵画表現という全く新奇なコンテクストを獲得した黄表紙に、南畝が惹かれないわけがない。戯作の大きなうねりの第一波となったのが春町なのであると『菊寿草』が明記した意義は大きい。このように、南畝から春町へのアプローチの最初は、春町の戯作史上での位置付けと評価の定立に

あつた。

翌天明二年正月、南畝は二冊目の黄表紙評判記『岡目八目』を上梓する。この正月に春町は、蔦屋重三郎から『跡を老松東へ飛梅我頼人正直われひのひあまこ』と『雛形意気真顔』の二種の黄表紙を刊行している。この二作品は『岡目八目』に取り上げられ、それぞれ敵役之部 上上吉×若女形之部 上トVという評価を得ている。『我頼人正直』の評言を例に引いておく。

……近年袋入斗おつとめゆへ、青本では久しぶり 頭取上を学ぶ下とはいへども、下をまなぶかみのゑんぎ、左大臣時平の役、名におふ建部源蔵と、名のつて通るほと、ぎす、き、に北野の開帳に、湯島の湯の時宜水になつて、色のさめたる袋入を、そめ直したる青本の仲間入、そさうの天神、雷通のしやれ、十一人の子ぶくしやは、七天神にうまれまして、恋川に水たへず、つきせぬ春のはる町と、ホ、うやまつて申。

ここ数年袋入本ばかり手がけていた春町が黄表紙の新作を公刊したという指摘が見える。本作は、天明元年七〜八月に湯島天神で行われた北野天神の出開帳を話の種として、天神の縁か

ら『菅原伝授手習鑑』の物語に付会して描く作品である。春町得意のトピックスや当世社会・風俗の詳細な当て込みと、人を喰った滑稽が巧みな秀作であり、そういう意味では、安永期黄表紙からの傾向を継いだ作品といえる。敵役之部でトップに置かれているのも、そうした点を高く評価したからと考えられる。その一方で、『雛形意気真顔』は若女形之部の末座に据えられ、上トVという低評価を付けられている。通笑『むかし／＼岡崎女郎衆』他とまとめて記された評言には、「……ひながたハ通すぎて三味線なしに河東をかたる様なれバ口ざみせんにのせました」とあり、本作の凝りすぎた趣向が理解されなかつたらしい。しかし春町からすれば、それは自覚的意図的な趣向の新奇性であり、評価は高くなかつたものの南畝から指摘されたこと自体は、春町の先鋭的な作品執筆を裏付ける形となっている。こうした南畝による春町の評価や文学史的位付けが、二人の積極的な交流の契機になつたと考えられる。春町と南畝を含む文人仲間による新吉原遊興（『としの市の記』）が天明元年十二月に行われたことと時期が一致していることも傍証となるであろう。

ここで改めて注目したいのは、南畝から春町へのアプローチが天明元年から二年にかけてのことであつたという点である。

数年ぶりになる天明二年の春町の黄表紙刊行と、翌三年正月の大量の作品刊行（黄表紙五、袋入本二）という、言わば大々的な春町の黄表紙界復帰を考え合わせると、彼の復帰には、評判記における南畝の評価や何らかの直接的な働きかけがあったからこそのものであったのではないかということである。そのことを裏付ける資料はなく、たまたま鱗形屋の事業再開のタイミングが天明三年であったからとも考えられるのだが、そうした外的要因に加えて、内的要因として南畝のバックアップがあったとするのは決して不自然ではない。

当の南畝自身も天明三年から黄表紙を刊行し始めている。天明三年から六年にかけて、全七作の黄表紙を上梓している。

南畝の黄表紙について、馬琴『近世物之本江戸作者部類』巻之一「四方山人」の記事には次のように記されている。⁹⁾

……くさざうしの作は旨となさゞれども、安永天明の間、二冊物三冊物の新板折々出たり（中略）しかれども戯作の才は喜三二春町の二の町にて尤けきあたり作はなかりき

この言を見るに、決して黄表紙作者としての評価は高くない。これは後代になってからも共通した南畝黄表紙の評価と言える

だろう。

さて、この天明三年というタイミングは、『菊寿草』『岡目八目』刊行の翌年に当たり、南畝が評判記で主張する黄表紙の趣向の新奇性と通人性⁹⁾を自ら実践に移したものと考えられる。ここ数年の黄表紙熱の結果としての実作である。もともと実際の黄表紙執筆の理由について、宇田敏彦氏は「文学イデオロギーはともかく、南畝の黄表紙への染筆は、（中略）二代目西村与八への餞であり、蔦屋重三郎の日本橋通油町への進出を寿ぐものであった」と指摘している。¹⁰⁾しかし、折しも春町復帰と軌を一にしていることを考えると、決して単なる黄表紙実践編というだけでなく、春町との親交を積み重ねたことによる影響と感化という側面があったのではないかと考えられる。作中に春町について言及することはないが、南畝作品の傾向として新奇性と通人性が確かに存していると宇田氏も記している。それらは、評判記において南畝が指摘している黄表紙の本質に通じる。また、宇田氏が南畝の黄表紙について、「……黄表紙のあるべき姿を指唆した彼の面目が躍如としており、表現が第一義の文学としての黄表紙のもつ可能性の追求が種々試みられている点は、高く評価されるべきである」と述べているが、この黄表紙としての表現の可能性を追求する考え方は、まさに天明期の

春町諸作に見られる新趣向と一致するものである。『岡目八目』における『雛形意気真顔』評にある「通すぎ」という言は趣向の先鋭性を指摘するものであったが、評者南畝は作品の面白さとしては否定しながらも、その表現の可能性の追求という姿勢自体は、作者南畝として継承していると言わざるを得ない。黄表紙界の先頭に立つ春町と、そのイデオロギーを知悉する南畝が、図らずも同期したかのような通すぎる趣向の黄表紙を生み出すのは、蓋し当然なのかもしれない。

そういう意味で、南畝の黄表紙創作における春町の影響、感化はあったと考えるべきである。直裁的な言及や似ているか似ていないかの問題ではなく、黄表紙を黄表紙として成り立たせる本質的部分を継承しているのである。

(二) 春町の内なる南畝

続いて、春町の黄表紙における南畝からの影響を確認していく。

黄表紙作品の考察に入る前に、一点春町の狂文を紹介しておきたい。南畝の母の六十賀を祝してまとめられた狂歌狂文集『狂歌 老菓子』（天明四年刊）に収められた「耳取鼻先婆序」である。数十名の狂歌師らが寄せた狂歌狂文の中でも、ひとき

わ異彩を放つのが春町のこの狂文である。架空の昔話もの黄表紙の冒頭部を模しており、最初の半丁には序文があり、次の半丁には桃太郎風の挿絵と文章が描かれている。春町ならではの黄表紙風狂文ということである。¹²⁾これは、黄表紙作者春町という社会的な認識を利用して、南畝の母に喜んでもらう工夫ということになる。更に穿つというと、黄表紙作者春町による黄表紙風狂文をもっとも面白がるのは、編者南畝ではないだろうか。春町が黄表紙界において特別な存在であるという認識を公にした張本人であるからこそ、春町自身が意図的に南畝を楽しませるために描いた、遊びともいべき狂文を欣喜して読んだものと考えられるのである。

つまり、春町は南畝による黄表紙の創始者という位置付けを自ら甘受していたわけである。だからこそ、新しさこそが要であると自覚した天明期の春町は、自分の作り出した黄表紙らしさを打破するために意識的に新奇な趣向を志向したのである。天明期に刊行された春町の黄表紙は、未刊行とされる『大通箱入之疳癩』を除いて、全十六作を数えることができる（袋入本を含む）。実質的な遺作である、寛政元年刊『鸚鵡返文武二道』までを併せると全十七作である。それらの作品について、安永期と比べて内容に変化が見られるようになったことは、拙稿「恋

川春町の戯作意識と方法」で指摘したことであるが、ここに簡単に紹介しておく。

安永期の作品の特徴としては、①当世流行やトピックスの取り込み（『金々先生栄花夢』『高慢齋行脚日記』など）、②作者登場・実生活のうがち（『其返報怪談』『三升増鱗祖』など）、③黒本・青本の作品（『唐倭画伝鑑』『甚三紅絹由来』など）の三点が挙げられる。『金々先生栄花夢』以降の黄表紙は黒本・青本の題材や方法を継承しつつ展開していったため、基本的には読み物としての性格を保持して創作された。作品のベースとなる世界として、和漢の古典文学や歌舞伎を中心とした古典芸能類の物語を借りて作られるのである。黄表紙には、既存の物語を利用しながらそこに当世の話題を取り込み、新奇な趣向を盛り込んで新しい物語を作り出す文学ジャンルであるという、通念ともいべき認識があった。言ってみれば、そこにはれっきとした物語性¹³⁾の存在を指摘し得るのである。

天明期の春町作品の特徴としては、①政治状況のうがち（『吉備能日本智恵』『悦鼠貞蝦夷押領』『鸚鵡返文武二道』など）、②狂歌活動の取り込み（『吉原大通会』『万載集著微来歴』『鎌倉太平序』など）、③物語性の解体（『無題記』『雛形意気真顔』『節季夜行』など）の三点が挙げられる。これらのうち①②は

安永期の特徴①②と対応している。①は天明期のトピックスとして幕府を揺り動かした事件や天災、そして寛政の改革をうがち、②は作者春町の実生活の一側面として狂歌活動を取り込んでいると考えれば、春町の当世の傾向がより焦点化したものと言っているのかもしれない。その一方で、③は黄表紙の根幹にあるべき草双紙としての本質を排除しようとするものである。絵画表現と文章の交響という草双紙の形式的な部分だけを残して、当世性と新奇な趣向をクローズアップして描く方法であり、そこには発想の契機としての古典や芸能はあっても、物語性は遠景に追いやられている。この方法は春町の発明ではないが、黄表紙の新たな方向性として春町による彫琢が行われていったものである。

さて、本題に戻る。こうした天明期の春町の新傾向が、どのような契機でこのタイミングに見られるようになったか考えてみたい。その理由として、やはり南畝の影が見え隠れしていることに気付く。

それがもつとも明白に表現されているのは、右記の特徴「②狂歌活動の取り込み」においてである。春町が天明狂歌壇を題材として扱った作品には、『吉原大通会』、『万載集著微来歴』、『鎌倉太平序』がある。前二作が刊行された天明四年は、その

前年に南畝・菅江編の狂歌集『万載狂歌集』が刊行され、江戸における狂歌人氣が最盛期に達した時期であり、そうした当世流行をうがった作品群でもある。

『吉原大通会』は、謡曲『大会』の世界を下敷きにして天明期の大通たちの遊興や文人趣味を描いた作品である。作中には天明狂歌壇の代表的な面々が勢揃いする場面がある(十一ウ・十二オ)。描かれている人物は、すき成(喜三二)・赤良(南畝)・木網・菅江・定丸・常閑・東作・裏住・秋人・元成・唐丸(葛重)らで、不埒(春町)自身は不在である。その書き込みに、次のような唐丸と赤良の会話がある。

(唐丸)「直さんへ、もしはるさんかちよつと」
(赤良)「はるとはだれだ、はる丁か」

直さんとは南畝の本名直次郎のことなので、葛重が南畝に春町の所在を尋ねている様子である。これは何か元ネタがあつての当て込みかもしれないが、ごく一般的な会話に見えるので、単に春町の動向を知る南畝にその所在を尋ねているだけのように思える。どのようにも解釈できる短文であるため、本意は不明と言わざるを得ないが、春町について南畝はよく知つ

ているという前提がそこにあることは確かであろう。

『万載集著微来歴』は、天明狂歌の火付け役となった狂歌集『万載狂歌集』の刊行の裏事情を『平家物語』の世界に仮託して描いた作品である。南畝と菅江による『万載集』編纂には、古くからの狂歌仲間である唐衣橘州が南畝一派を排除して『狂歌若葉集』を編もうとしたことが契機となつていることはよく知られていよう⁽¹⁹⁾。それに対抗して編まれたのが『万載集』であり、結果としてこちらの方が圧倒的な人氣を獲得した。こうした南畝対橘州という軋轢の構図を、源氏対平氏の合戦に置換したわけである。作中には、藤原俊成の雑掌として四方赤良が、その草履取として酒上不埒が登場する。狂歌壇における位置を反映させた人物設定ということであるが、そのみならず二人の親交をも反映させていると考えてよからう。作品のクライマックスである源平の武将らが相集う宴の場面は、天明三年正月十三日に京橋伊勢屋勝助にて催された、約三十余名の参加者を集めた元木網狂歌会の様子を写しているとされる(九ウ・十オ)。⁽²⁰⁾ その図には左上上部で狂歌を詠み上げる人物(袖に巴紋らしきものがある)で赤良)が居り、その左隣に座るのが不埒だと考えられる。『万載集』にまつわる対立の中でも、春町は常に南畝の側に居り、その問題を左右できる立場にはなかつたことを暗

に示しているわけであろう。

『鎌倉太平序』もまた、南畝と橘州の対立を素材として、これも『平家物語』の世界に仮託した作品。先賢の研究では、『万載集著微来歴』と同様天明四年頃に書かれた作品であるが、その世界と趣向があまりにも近似しているため、刊行をずらしたものと推定している⁽¹⁶⁾。鎌倉山に住む大通儒菅荘兵衛と梶原景時との対立・謀略の物語に、赤良と橘州の軋轢を重ねている。主人公菅荘兵衛について、「…号と字ハなんほとやらかとやらぞく名ハかん庄兵衛と言ひける」(一オ)と紹介しており、南畝が作品の中心人物であると明示する。本作には春町は登場しないが、南畝の身近に持っていたからこそ知られる狂歌壇の情報⁽¹⁷⁾が幾つも垣間見られる作品である。

狂歌壇に居たからこそ書くことのできる作品であり、春町はそこでの南畝との関係性を明示していることがわかるであろう。続いて、「①政治状況のうがち」における春町と南畝について考えていきたい。

先にも述べたように、安永期から顕著だった当世のトピックスの取り込みであるが、天明期はその対象になる幕政に関わる大きな出来事が非常に増加した時期であったため、直接ではなく間接に作中に描きこまれることが漸増していった。天明期は

政治的時期だったのである。『武江年表』『翁草』(き、のまにく)等から、それら幕政を揺るがした天災や事件、そして幕府の動きを抜き出してみることにする。

天明二年七月十日

関東に大地震(『き、』)

七月三年七月六日

浅間山代噴火(『武江年表』)(『翁草』)

夏)

関東・奥州飢饉(『武江年表』)

天明四年三月二十四日

佐野善左衛門、江戸城中で田沼意

知を斬殺(『き、』)

夏

諸国飢饉(『武江年表』)

天明五年夏

早にて凶作(『き、』)

天明六年七月十四〜十八日 江戸大洪水(『翁草』)

夏

諸国飢饉(『翁草』)

八月

十代将軍家治死去(『き、』)

田沼意次老中職を罷免(『き、』)

天明七年四月十五日

十一代将軍家齐宣下(『き、』)

五月

打ち壊し運動多発(『武江年表』)

六月

松平定信、老中職に就任。改革政治を始める。

十二月

土山宗次郎死罪(『き、』)

天明八年七月 田沼意次死去

目立つ出来事を持ったのだが、以上のようにきわめて多い。春町は小藩とはいえ駿河国小島藩の江戸詰であったわけであるから、これらの大事に奔走する武士や幕臣を身近で見聞したのであるうし、南畝に至っては御徒暮らしとはいえ幕臣であった。天明文化興隆の立役者でもある二人だが、その一方で、武士であるからこそこうした大きな政のうねりを肌で感じていたことは間違いない。

春町の天明四年の黄表紙に『吉備能日本智慧』がある。吉備真備入唐説話をベースにして、真備によつて唐で日本趣味が流行していく様子を滑稽に描く作品だが、これは当時の日本における中国趣味を反転させる趣向である。本作における聖武天皇は唐物好きとして描かれているが、これは当時の老中首座田沼意次の唐物好きのうがちであるという指摘がある¹⁸⁾。また、聖武天皇と真備の関係は、田沼と勘定奉行松本伊豆守の関係を反映させているともされる。重商主義に伴う賄賂政治も取沙汰された田沼ゆえに、その贅沢な中国趣味を取り込み、ちゃかした作品であろうか。しかし、そのちゃかしが日中逆転趣向の滑稽とうがちに隠れて、揶揄や嘲笑として浮かび上がってこないからいがある。あるいは、春町は念には念を入れて政治的要素を隠

していたのかもしれない。

『吉備能日本智慧』に比べれば、実質的な遺作である『鸚鵡返文武二道』は、あまりにも直接的に改革政治を取り上げており、現在読んでもひやひやするほどだ。外題の『鸚鵡返』が松平定信の教訓書『鸚鵡言』を写していることから始まり、平安時代の延喜帝の善政に仮託して、寛政改革が世の中のあらゆる面を改善していく様を春町得意の『無題記』的逆転趣向でうがち、笑いに転化させていく作品である。勿論、本作は喜三二の『文武二道万石通』（天明八年刊）を承けて作られた作品であるが、これらの政治的要素の色濃い黄表紙においては特に南畝からの影響を見出すことはできないかもしれない。

しかし、ここで注目したのは、天明八年に刊行された『悦鼻眞蝦夷押領』である。改革政治が本格的に始動した時期の刊行であり、源義経の蝦夷渡り伝説（『御曹子島わたり』『義経勲功記』ほか）を下敷きにして、蝦夷を治めた義経一行と、日本化していく蝦夷の様子、密貿易を企む蝦夷人団の暗躍などが描かれている。作品の詳細は『江戸の戯作絵本（三）』の小池正胤解説²⁰⁾に譲る。

天明当時、蝦夷を治めていた松前藩は、藩主志摩守道広のもとアイヌとの交易を独占し、既得権益を保持するため、蝦夷に

関する情報の広範な伝播を阻害していたという。その状況を憂慮した仙台藩医工藤平助は『赤蝦夷風説考』（天明元年頃刊）を著した。この『赤蝦夷風説考』の影響について小池氏は次のように述べる。²¹

田沼意次の膨張政策を刺激し、勘定奉行松本伊豆守秀持は戯作者平秩東作をひそかに蝦夷地視察に派遣した。東作は翌四年江戸に帰って『東遊記』をまとめ、五年大々的に調査が組まれた。

天明七年、田沼の失権によりこの蝦夷調査は無為に終わるが、寧ろそのために春町はこうした政治色の強い題材を作品に取り上げることができたのではないか。定信の新政におもねる態度は『鸚鵡返文武二道』ほど明確ではないものの、事情通が読めば一目瞭然だったろう。

ところで、この蝦夷調査は実質的に勘定組頭である土山宗次郎によって進められたようだ。文人や狂歌師との交遊が盛んだった土山の縁で、町人（煙草屋）かつ狂歌師・戯作者の平秩東作は蝦夷視察に赴くことになったのである。²²この土山ともっとも親交の厚い文人が南畝であった。特に、天明初期の数年、

非常に密な交流があったことは、南畝の幾つかの記録から確認することができる。例えば、天明二年正月から四月一日までの日記『三春行楽記』²³をみると、一緒に人形浄瑠璃を観劇したり、吉原で遊興に耽ったり、初鰹を食べている。その交遊の回数はいは三ヶ月で十三回にのぼり、そのうち六回は平秩東作も同行していた。

そして、この天明初期というのは、南畝と春町が文芸的な接近をした時期でもある。二人の交遊はもっぱら狂歌を通じて続いた。とすると、春町が土山と直接顔を合わせていたかもしれないことは想像に難くない。黄表紙作者として名を馳せていた春町のことはもちろん土山も知っていたろうし、狂歌師不埒のこともご存知だったと思われる。たとえ顔見知りではなかったとしても、南畝を通じてお互いの存在を知り、情報を有していたことは間違いない。とすれば、蝦夷視察・調査の件も、春町は直接とはいわなくても耳近く接し、情報を得ていたであろう。もちろん松前志摩守道広の派手な言動は世に知られるところであったので、一通りの噂は春町の聞き知るところであったと考えられる。それに加えて、蝦夷地視察の実権を掌握する幕臣との邂逅は、いやが上にもそのトピックを意識せざるを得なかった。本作には、『万載集著微来歴』のような楽屋落ちは見当た

らないが、団観の暗躍（松前藩の密貿易）など、かなり踏み込んだ政情が描かれている。つまり、作中の人物も実在の人物が当てられると考えるのはおかしくはないのである。井上隆明氏は、『悦鼠蝦夷押領』の登場人物について、「…義経主従には田沼老中、松本勘定奉行、土山勘定組頭、戯作者平秩東作が当てられよう」との説を提示している。この批定が正しいとしても、後の改革政治もの黄表紙と比べると、ここには全くと言っていいほどちやかしや批判は感じられない。その点では、変革期の作品とはいえ、新政による時代の変化をまださほど意識してはいなかったといえよう。

さて、天明後半期の春町作品には政治色の強いものが多いことを述べてきた。春町自身が武家であり、政情には通じていたことと思うが、それを後押しするように幕臣南畝や土山宗次郎らとの交友が更に春町の眼を政治の動きへと向けさせたことは指摘した。折しも、天明期の騒然とした世情や幕府の内情の揺動があり、それらを作中に取り込んでいったことが見えてくるのであった。

おわりに

春町と南畝の関係性について、黄表紙を中心に、種々残されている文献資料を博搜して確認し、検討してきた。南畝からみた春町、春町からみた南畝、それぞれの側面から考えてみたが、どうしても状況証拠的にならざるを得ず、直接的な言質はほとんど得られなかった。

彼らの私生活における交流を垣間見ることのできる資料としては書簡が二点確認できる程度であろうか。『彗星 江戸生活研究』に紹介されている一点は、春町が南畝の湿瘡（皮膚感染症）を心配するもの⁽²⁵⁾。早稲田大学図書館所蔵のもう一点は、春町が南畝から借りていた『徳和歌後万載集』『狂歌才藏集』などの書物を返却することと、計画していた催しを延期する旨を綴ったもの⁽²⁶⁾である。どちらもかなり親しい交流があったものと推察できる資料である。

いずれにしても、南畝によって春町は黄表紙界における位置付けが確固としたものになったし、南畝の影響で狂歌界に足を踏み入れることになった。そういう意味では、春町の戯作者としての活動にかなり大きな影響を与えたのが南畝ということに

なるだろう。春町からみた南畝の存在については、春町が見聞した狂歌壇の内実を如実に反映した黄表紙三作品（『吉原大通会』『万載集著微来歴』『鎌倉太平序』）に表わされている。そのいづれにも南畝が登場し、うち一作には南畝の傍らに春町自身が近侍し、別の一作にも春町の影が見え隠れする。春町とつての南畝像——狂歌壇における南畝の位置——が分かりやすく示されているとともに、二人の関係性も描き出されているのである。

また、南畝は黄表紙を創作した折に、春町の黄表紙に表現されているイデオロギーに感化されて、表現第一義の作品を作り出していた。その点においては、南畝もまた春町の影響を受けていたのである。

注

- (1) 『菊寿草』中の『見徳一炊夢』評言に「……作者恋川氏休まれて後は……という一節がある。」
- (2) 『日本文学論究』第七十六冊（二〇一七年三月・國學院大學国文学会）所収。
- (3) 森銃三「春町作黄表紙の鑑賞」（『森銃三著作集』第一巻所収・一九八八年・中央公論社）

- (4) 拙稿「酒上不埒の狂歌——附・全狂歌ならびに索引」（『國學院大學紀要』第五十一巻・二〇一三年・國學院大學）
- (5) 『大田南畝全集』第十一巻（一九八八年・岩波書店）
- (6) 和田博通「菊寿草」前後（浜田義一郎編『天文学』資料と研究）所収・一九八九年・東京堂出版）
- (7) 『大田南畝全集』第七巻（一九八六年・岩波書店）
- (8) 同書。
- (9) 木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』（一九八八年・八木書店）
- (10) 宇田敏彦「南畝と黄表紙」（『近世文芸 研究と評論』第二十号・一九八一年・早稲田大学文学部神保研究室）
- (11) 同論文。
- (12) 拙稿「恋川春町の狂文」（『國學院雑誌』第一一三巻第一二号・二〇一二年二月・國學院大學）・同「恋川春町の狂文全翻刻」（『瀧谷近世 國學院大學近世文学会会報』第十九号・二〇一三年・國學院大學近世文学会）
- (13) 同論文。
- (14) 『江戸の戯作絵本（二）』『万載集著微来歴』解説（宇田敏彦執筆・一九八一年・社会思想社）
- (15) 同書。
- (16) 宇田敏彦「春町の『鎌倉太平序』をめぐって」（『近世文芸 研究と評論』第十三号・一九七七年・早稲田大学文学部神保研究室）
- (17) 『武江年表』は東洋文庫116『増訂武江年表』一（金子光晴校訂・一九六八年・平凡社）。『翁草』は『日本随筆大成』第三期一九巻（一九七七年・吉川弘文館）。『き、のまにく』は『未刊随筆百種』第六巻（一九七七年・中央公論社）。
- (18) 小林ふみ子「江戸戯作の「ニッポン」自慢」（法政大学国際日本研究所研究成果報告書『国際日本学』第八号・二〇一〇年・法政大学国際

- 日本研究センター）・拙稿「黄表紙『吉備能日本智恵』翻刻と注釈」（『澁谷近世 國學院大學近世文学会会報』第二十三号・二〇一七年・國學院大學近世文学会）
- (19) 佐々木享・香西由利恵「『吉備能日本智恵』について——天明中期における春町作品の再評価」（『徳島文理大学文学論叢』第十八号・二〇〇一年・徳島文理大学）
- (20) 『江戸の戯作絵本（三）』「悦最肩蝦夷押領」解説（小池正胤執筆・一九八二年・社会思想社）
- (21) (20) と同解説より。
- (22) (20) と同解説より。
- (23) 『大田南畝全集』第八卷（一九八六年・岩波書店）
- (24) 井上隆明「赤蝦夷風説考の世界」（『北海道開拓秘史 赤蝦夷風説考』一九七九年・教育社）
- (25) 『慧星 江戸生活研究』一九二九年五月号（春陽堂）掲載「恋川春町の手紙」に市島春城所蔵の書簡として翻刻紹介されている。
- (26) 早稲田大学図書館所蔵「恋川春町書簡・大田南畝宛」（チ06—03890—248）